

## 優秀賞

かわいそうじゃなく……

横須賀市立神明中学校三年

乾 航 治

「かわいそうじゃなくて……」

母と2人でテレビを見ていたときに、母がつぶやいた言葉です。見ていた番組は発達障がいの人を取り上げたものでした。

僕は広汎性発達障がいと軽度知的障がいです。小さいときは歩き始めも遅くて、言葉を話すのもとても遅かったそうです。幼稚園では、先生の話をじっと聞けなくて、毎日毎日しかられた記憶しかありません。その幼稚園時代の終わりの頃に受けた検査で障がいがあることがわかりました。しかし、僕の両親はおどろかなかったそうです。おどろかなかった理由は、障がいがあってもなくても何も変わらないからだと言っていました。障がいがわかってからも母はいつもと同じように、自分のことは自分で、できないことはできるまでがんばるように教えてくれました。

ある日僕が何度やってもできないことがあって、泣きながら、

「僕は障がいがあるからできないんだ。」

と言ったとき、今まで見たことがないくらい怖い顔の母にしかられました。母は、「障がいを言い訳にしてはいけない。私は障がいがあることをかわいそうだと思うたことはないよ。障がいがある人はその障がいを乗り越えられる努力をする才能が必ずそなわっているから。だから障がいのある人を見かけて手助けをするときは、かわいそうなんて思っちゃいけない。同じ人間として困っている人がいたら助ける。それだけでいい。」

その言葉を聞いて、自分が障がいがあるのに、もっと重い障がいがある人に対してかわいそうだと思ってしまうことに気がつきました。学校ででき

ないことや、わからないことが多い僕をクラスのみんなはよく助けてくれます。みんなは僕をかわいそうだと思って助けてくれていたのではなく、ただ困っているから助けてくれているのだと思います。いつも助けてくれるクラスのみんなのおかげで、僕はできないことは多いけれど、積極的にクラス活動に参加し、クラスの一員だと感じることができるようになりました。クラスのみんなの優しさに感謝しています。最初に書いた番組では、発達障がいの人に対して冷たくする人を取り上げていて、そのテレビに出ている人が、

「障害があるだけでもかわいそうなのに、健常者が冷たくするなんてひどい。」と言っていました。うちの家族はもちろん、僕のことをかわいそうだと思っていし、特別あつかいもしません。それが僕にとっては普通だし、そうしてくれたからこそがんばれる僕がいます。僕の障がいは治りません。でも、治らなくていいです。障がいがあるからこそわかる、人の心のつらさや痛みがあるからです。そしていつか僕に子どもができたなら「かわいそうだから。」と思うのではなく、同じ人間としてどんな人にも優しくしてあげてほしいと思います。

## 銀賞

人それぞれの個性を見つけて

横須賀市立常葉中学校一年 大瀬 美希

私は、アルトログリポシス（先天性多発性関節拘縮症）を持って生まれ、立って歩くことができないため、車いすで生活しています。この病気は、両手足に出ることが多いので、両足だけで済んでいる私はラッキーです。触感、痛み、温度、振動などの感覚はあるので、高い所に手が届かないこと以外、工夫すれば日常生活でできないことは少ないです。

しかし、見てすぐわかる足の変形で「どうしてそんななの？」と聞かれたり、じろじろ見られたりすることがたくさんあります。車いすというだけで、常に人の助けが必要な「障がい者」として見られてしまうのです。人より不自由があることは認めるけれど、私は特別扱いされるのが一番きらいです。

みんなと同じ人間なのに……と色々な感情が込み上げてきます。

ある日、家族で車に乗って出かけた時、車いすのマークが描いてある駐車スペースに車をとめたら、となりの車から車いすではない人が降りてきました。どうしてここに車をとめるのだろうと思い、車を見ていたら、母から意外な話を聞きました。

日常的に町中で目にする「車いすのマーク」は、車いすの人のためのマークではないこと。さらに、障がいのある人が優先して使えるという意味でもなくて、「思いやり」で必要としている人にゆずるべき場所であるということを知りました。

見てわからなくても、何かここに車をとめたい理由があったのかもしれない。

私は、「見てもすぐにはわからない」ことを考えてみました。同じ教室で活動する支援級のことです。見ただけでは、どのような障害を持っている

のかわからない人がほとんどで、一緒に過ごす時間の中で、もしかするとこの人は、こういうことが苦手なのかもしれないと感じたりする時もありますが、本当の事はわかりません。

たとえば、私がエレベーターに乗りたい時、人がいっぱい待たなければならぬ時もありますが、私の姿を見て乗るスペースを空けてくれたり、わざわざ降りてまでゆずってくれる人がいます。

車いすに視線が集まりやすく、嫌な気持ちになることもあります。見てもすぐわかる障がい者である私は、言葉にしなくても周りの人に気がついてもらえるのです。

そのような日々の出来事を思い返し、私は、すぐに気づいてもらえない障害を持っている人、見てもわからない体調不良を抱えている人は、本当に大変だろうなと思うようになりました。

「目に見えるものだけじゃない。」

障がい者に限らず、みんな見えない悩みや不安を抱えているのではないのでしょうか。それに気がつくのはとても難しいことですが、もし身近な人の「何か」に気がついたら相手のために、自分にできることはないだろうかと考えてみようと思います。

一人の人間として私を見てくれる人に出会えた時、とても嬉しく思うのです。見えるところも、見えないところも、人それぞれ違う「個性」だと思うからです。

人と自分を比べてしまうこともあります。自分らしくいることが一番大切なことだと私は思います。

## 銀賞

### 新型コロナに負けない社会を目指して

横須賀学院中学校三年

高橋 亜実

2019年12月初旬に、中国の武漢市で第1例目の感染者が報告されてから、わずか数カ月ほどの間に、私たちをとりまく世界は一変しました。マスクをした生活が当たり前となり、ソーシャルディスタンスの確保やステイホームの徹底が当然のように叫ばれるようになったものの、私は新型コロナとは無縁の人間で、どこか別世界の出来事のようにとらえていました。もちろん帰宅後のうがい手洗いは徹底していたし、極力外出を控えて感染防止につとめてはいたものの、テレビで映し出される様々な映像が、非日常すぎて自分とは関係のない出来事のような感覚でいました。そんな私を変えた出来事が2020年12月末突然起こりました。

小さいころから勉強を教えてくれたり、いつもやさしく接してくれたりした叔父が、今年は年末年始に帰省することができず、私に会いに来られないかもしれないという電話をしてきたからです。叔父は高熱と咳があり、体調も悪く、新型コロナウィルスに感染したかもしれないと、少し不安そうな声で私に電話越しに話してくれました。いつもの風邪や体調不良であったならば、落ちついて気遣う言葉をかけられたのかもしれないけれど、その時の私は、ただただ新型コロナウィルスへの不安と恐怖心から、叔父に対して「絶対に我が家へ近づかないでほしい」といった冷たい言葉を浴びせかけ、一方的に電話を切ってしまいました。自分でもなぜそんな冷たい行動をとってしまったのか、その時には全く理解できず、ただただ身近な人間にさえも新型コロナウィルスの影響が迫ってきていることに恐怖を覚えるとともに、親族に新型コロナウィルス患者が存在したという情報が、もし流出して、私達家族へも批判やプライバシー侵害などの矛先が向けられたりしないかといった心配が胸をよぎり、心臓が締め付けられるような気分になりました。

その出来事があってから、自然と私は新型コロナウィルスのニュースを食い入るようになり、世界でどのようなとらえ方が人々の中でされているのかについて

て関心を持つようになりました。正しい情報を身に付けていけばいくほど、新型コロナウィルスという感染症に不安や過剰な心配をするあまり、私のような心無い行動をとってしまうケースが世の中にはびこってしまっている現実を目の当たりにするようになりました。

例えば、感染者に対する偏見や心無い批判はもちろんのこと、世界で発生した事例としては、感染していないアジア人に対しても、アジア人というだけで暴力事件が起こってしまったり、日本国内でも医療従事者に対して偏った情報から理不尽な偏見や心無いSNSでの誹謗中傷が後を絶たないということも知りました。また、そうした行き過ぎた正義感からくる差別が、社会秩序を乱し、医療崩壊を招くとともに、人の心を崩壊させていくことも知りました。本当に私たちが問題視して向き合っていくべきことは、新型コロナウィルスに対する対策であったり、感染者をいかに収束させていくのかといったことであるにもかかわらず、人間同士が傷つけあい、疑念や偏見から差別を繰り返して自らを崩壊させてしまっていることを痛感しました。

今もなお、新型コロナウィルスの感染者数は増え続けており、第五波の勢いが増している中、私は叔父との出来事を通じて、気づいたことがあります。それは、新型コロナウィルスという未知の感染症に対して、新聞やニュース、本などといった様々な媒体を通じて「正しい情報」を身につけ、冷静に行動していく必要があるのではないかとということです。あの時の私がそうであったように、不安な気持ちや相手を疑う気持ちというものは、偏った情報や不確かな伝聞から引き起こされることが大半です。そうした不確かな情報に惑わされることで、恐怖心から心無い行動や言動、差別と偏見をもって相手を傷つけてしまう構図が、今もなお社会全体で生み出され続けているように感じます。むしろ今必要なのは、正しい情報を身に付け、冷静に行動を起こし、感染症と闘う人たちを温かい気持ちで受け入れて支援していくことにあるのではないかと私は考えます。今、私達人間ひとりひとりができること、それは、正しい情報をもってこの新しい社会を共に乗り越えていくことだと考えます。誰しもが感染する可能性があり、誰しもがこの感染症と闘う可能性がある社会で、適切な情報を活かしながら、深い絆を構築できる社会を実現できるよう、私自身もこれからさらに理解と知識を身につけ、明るい未来を築ける一人として成長していきたいです。